『観世当流童子小うたひ并狂言記入』収載の狂言記について

大倉　浩

〇、はじめに

万治三（一六六〇）年の『ゑ入狂言記』[1]（以下、正篇万治版と呼ぶ）刊行に始まり、江戸期を通じて盛んに行われた版本「狂言記」（四種全二百番、以下、四種の総称として「狂言記」と呼ぶ）の出版であるが、その依拠した狂言台本の流派・出自をはじめとして編集の経緯にも不明の点が多く残っている。[2] さらに初版から改版・補刻本へと版を変えていく中でも、本文やさし絵に改変が行われ、狂言の舞台や用語の変遷を知るうえで注意すべき事柄が多くある。[3] 本稿でとりあげる正徳元（一七一一）年刊『観世当流童子小うたひ并狂言記入』[4]（以下、本書と呼ぶ）は、観世流の小謡など部分謡を集めて版行された小謡本の一種であるが、題名にあるように小謡のほかに頭書として狂言一七番をさし絵入りで併記している。本書中には明記していないが、これらは全て版本「狂言記」に拠ったもので、それも正篇と元禄一三（一七〇〇）年刊『狂言記外五十番』（以下、外篇と呼ぶ）の二種から引用したものなのである。その本文やさし絵が、正篇・外篇のどの版に拠ったものか、また、それらとどのような異同があるのかについて詳しいことは、管見の限り報告されていない。一七番と番数が少なく部分的ではあるが、「狂言記」の別版として、看過出来ないものである。

本稿では、本書収載の「狂言記」の本文・さし絵について、諸版本との比較の結果の一端を報告し、「狂言記」出版の流れの中での位置付けを試みたい。

一、『観世当流童子小うたひ并狂言記入』について

まず、本書の概略を述べる。大きさは半紙版、紺表紙の版本で、奥付に

右小謡者観世当流之以
章句秘密悉令改正者也
正徳元年六月吉日
書肆　大坂順慶町一丁目筋
田原屋平兵衛梓

という識語と刊記がある。『国書総目録』によると、鴻山文庫をはじめ京都府立大学などが所蔵しており、書肆名には田原屋以外の刊記を持つものもあるようである。本稿では、筆者が調査させていただいた法政大学能楽研究所鴻山文庫本（十　91番）に拠っているが、鴻山文庫にも「明和九年　和泉屋卯兵衛」「文化十三年　河内屋太助」の刊記をもつ再刷本がある。[5]

本書は一冊本で表紙左上に、

観世当流童子小うたひ并狂言記入

という題箋があり、見返しに、

夫謡は神国の舞楽祝言の風俗なり其徳の高き事普く人々の知れるわざなれば

と始まり、謡いの重要性と稽古の必要性を述べる序文がある。その終りに、

渡る世間の子供衆の専ら師家に入て習はるゝ所を抜出し且間の狂言記を頭に書くはへ童子小謡と名付板行せしむる者之

と頭書について「間狂言」を書き加えたとの説明があるのだが、実際に記されているのは「間狂言」ではなく本狂言であって、序文の説明とは一致していない。続く一丁表には「常に御嗜み有べき事」として、謡い方の注意一〇箇条があり、下段には翁舞台図が描かれている。一丁裏は目録で、高砂からはじまる小謡やクセ謡など計六〇曲を春夏秋冬雑の順に配している。全て五十丁。本書の解題は、表章（一九六五）にあり、表氏によってすでに本書の頭書の狂言が「狂言記」からの引用であることが指摘されている。しかし、「狂言記」研究の中で本書について触れたものは管見にはなく、筆者自身もこの表氏の解題から本書を知ることとなった次第である。

頭書は一丁裏の目録の上から始まり、まず「狂言記」と内題があり、

じせん石　弐人
大名　立ゑぼし　ちいさ刀
長はかま
くはじや　半はかま

と曲名・役者・装束が記され、続いて、

▲大名　まかり出たるはかくれもない大名

というように役名とセリフが二〇行書きで記されている。さし絵は本文の途中、丁の表側に一〇行分程度のスペースで舞台の役者が簡略に描かれている。狂言については目録がなく、「二千石」から「福の神」まで一七番が連続して書かれていて最終五十丁裏に、

右之狂言記十七番者
秘密之以正本令板
行者也

という識語があるが、表氏の指摘のように各曲ともその本文・装束などをみると、元禄期までに刊行されていた「狂言記」正篇・外篇から引用されたことは明白で、「正本」に拠ったものとはとうてい信じがたい。

本書は、貞享年間から始まる「新種小謡本時代」[6]とも呼ばれる小謡本全盛期に現われた、頭書に様々の記事（いろは、十干十二支、九九など）を盛り込んだ小謡本の一種である。刊記にある正徳元（一七一一）年という時期は、正篇元禄版や外篇初版の刊行から十年ほどしか経過していない時期であり、この時点で「狂言記」を引用した版本があるということは「狂言記」受容の歴史から注目されてよいし、後述するようにそこに引用されたのが正篇と外篇であって、外篇と同年に刊行された『続狂言記』（続篇）からは引用されていないということも、文化年間の正篇・続篇・拾遺の三種揃いの刊行以降では見過ごされがちな外篇を再評価するうえでも、見逃せない

資料といえるだろう。

二、所収の狂言一七番について

次に本書所収の狂言一七番の曲名と、「狂言記」四種での所在、曲柄の分類（大蔵虎明本による）を示す。

二千石	（正篇巻二―五）	大名
鞠蹴座頭	（外篇巻四―七）	座頭
笠の下	（正篇巻四―五）	出家
靭猿	（外篇巻五―三）	大名
鬼清水	（外篇巻五―五）	小名
武悪	（正篇巻五―四）	大名
こんくわい	（正篇巻二―二）	集狂言
ぶす	（外篇巻三―四）	大名
柿山伏	（正篇巻三―五）	山伏
しびり	（外篇巻二―四）	小名
仁王	（外篇巻五―四）	集狂言
伯母が酒	（正篇巻二―四）	集狂言
どぶかっちり	（正篇巻三―八）	座頭
伊文字	（正篇巻五―二）	女
長光	（正篇巻五―七）	集狂言

柑子　（外篇巻五―八）　小名
福の神　（外篇巻五―十）　脇狂言

これを見ると曲の選択・配列に、今のところ特定の意味は見出せない。本編である小謡同様に、稽古用・入門用の狂言が集められているかというと、「武悪」「こんくわい」など大曲も含まれており、外篇にある「いろは」や「口真似」など入門用の狂言が本書には採られていない。曲柄で多いのは大名・小名という主従物の七番であるが、特徴と言えるほどではない。むしろ、もとの正篇・外篇にあった、聟物、百姓物、語り物の狂言が採られていないことが注意され、狂言の多様な曲柄を全て網羅しようという意図も強くなかったと考えられる。また、これまで拙稿[7]で考究してきた類似する流派の台本との関係も、虎明本や和泉流三百番集本に近い曲もあれば、不明や不似の曲もあり、顕著な傾向は見出せない。

さらに、配列にも一貫した意図は見出しがたく、正篇、外篇の順序もバラバラである。全体では正篇から九番、外篇から八番と、ほぼ均等に採られていることが注目される。あるいは両篇に拠りながらも、均等にそれも交互に配列して引用することで、当時流布していた版本「狂言記」からのあからさまな引用であることを隠そうとする意図があったとも考えられる。また、正篇・外篇とも巻一の曲からの引用がないが、これも、「狂言記」からの引用を隠すための姑息な方策とも解釈できないこともない。

もう一つ気になるのは、正篇には寛文五（一六六五）年版『狂言記』[8]という、一一番を抄出した別版があることが知られているのだが、本書に採られた正篇の九番とこの寛文五年版の一一番とには、全く重なる曲がないということである。これも、あるいは寛文五年版との曲の重出を避けることも、本書が「狂言記」からの引用であることを隠そうとした意図のあらわれだろうか。

いずれにしても、本書が正篇と外篇に拠って狂言を抄出していることは明らかであり、本書刊行の時期、すなわち外篇初版刊行の一一年後では、外篇が、正篇と対をなす「狂言記」としてとらえられていたことをうかがわ

せる資料であると言えよう。

三、本文について

本書と「狂言記」諸版との本文の異同については別稿で詳細に述べることとして、ここでは本書が拠った「狂言記」の版について、本文の比較例をいくつかあげて推定してみる。[9]

まず、「二千石」の本文の冒頭部分で比較してみる。

・本書（目録上段）

▲大名　まかり出たるはかくれもない大名。
かやうにくはは申せ共つるゝ下
人なたゞ一人。壱人の下人めが。そ
れがしにひまをもこはず何方へ
やらおりそへてござる。きけば
夜前帰りたるやうすで御ざる。
かれがしたくへ立こへ。せつかんの
くはへうと存る。程なふかれがし
たくは是で御ざる。

・正篇（万治版、巻二　14オ）

▲大名　まかり出たるはかくれもない大名。かやうにくわは申せども

つるゝ下人なたゝ一人。一人の下人めが。それかしにひまを
もこわず。いつかたへやらおりそへて御ざる。聞けば。夜
前帰りたるやうすで御さる。かれが私宅へたちこへ。せつ
かんのくわやうとぞんずる。ほとなふかれがしたくは是で
御さる。

・正篇（元禄版、巻二　11ウ）

▲大名　まかり出たるはかくれもない大名。かやう
にくわは申せともつるゝ下人なたゞ一人。
一人の下人めが。それかしにひまをもこはず。
いつかたへやらおりそへて御ざる。聞ば夜
前帰りたるやうすで御ざる。かれが私宅
へたちこへ。せつかんのくわへうとぞんずる。
ほとなふかれがしたくは是で御座る。

それぞれに、かなづかいや濁点の有無、語の漢字表記などに差があることがわかるが、句点の区切り方など本文そのものには大きな違いはない。本書の特徴としては「くはじや」や「くはは申せ共」など、合拗音表記に「くは」を用いることが多い点があげられるだろう。こうした本書の表記については、拠った「狂言記」の表記だけでなく、本書の本編である小謡の表記と共通している点がありさらに検討が必要であるが、このことについても稿をあらためて述べることとする。

では、正篇の万治版、元禄版のそれぞれの本文と比較してみると「くはへうと存る」の例にみるように、元禄

版「くわへう」に対応しており、万治版「くわやう」のような表音的なかなづかいをとっていない。こうした例は他にもみられ、本書が正篇では万治版ではなく元禄版に拠っているとみられる。このことは、次の「武悪」の本文の比較からもいっそう明らかである。

・本書（17オ）

さあ〳〵そなたもき
てくれやれ▲（くわ）心得ておじやる▲（ふあく）
あゝゑいすを見付ておじやる
いかひ事のざこでおじやる。なふ〳〵
しつねんした事がおじやる。あま
りうれしいまかせにあみをも持（もた）
ずにひよいとでたはいの▲（くわ）なふ
〳〵。何としたものでおじやろ
▲（ふあく）あゝ身が草よせといふ事
をしつておじやるほどに。

・万治版（巻五　14オ）

さあ〳〵。そなたも。きてくりやれ▲（くわしや）心得ておぢやる。あゝ。ゑいすを見付
ておぢやる。いかひ事のざこでおぢやる。のふ〳〵失念（しつねん）
した事がおぢやる。あまりうれしいまかせに。あみ
ももたずに。ひよひとてたわいの▲（ふあく）のふ〳〵。なにと

した物でおぢやろ▲（くわしや）　あゝ。身がくさよせといふ事を。
しつておぢやるほどに

・元禄版（巻五　13ウ）

さあ〳〵そなたも。きてくり
やれ▲（くわしや）　心得ておぢやる▲（ふあく）　あゝ。ゑいすを
見付ておちやる。いかひ事のざこでおぢ
やる。のふ〳〵失念（しつねん）した事がおちやる。あまり
うれしいまかせに。あみをももたずに。ひ
よひとでたはいの▲（くわしや）　のふ〳〵。なにと
したものでおちやろ▲（ふあく）　あゝ身がくさよ
せといふ事をしつておじやるほどに。

この部分、万治版で役名を誤ったところを、元禄版で正したとみられる部分で、「あゝ。ゑいすを」からを元禄版は武悪のセリフとしており、本書はこの元禄版と同じ（ただし、本書は役名が途中から「くわじや」→「くわ」のように略すことが多い。）になっている。他にも本書と元禄版の本文との対応例は多く、（この部分でも万治版が「あみももたずに」とあるところを、本書と元禄版が「あみをも持ずに」とする。）また、後述するように、さし絵も万治版より元禄版に拠ったと思われる点が多く、万治版は参照されたにしても、元禄版が主であったことは本文の比較から明らかである。

では、外篇に拠った八番はどうであろうか。こちらには、正篇のような別版は現在までのところ確認されておらず、初版とみられる三都の書肆を連記した野田版[10]と、求版による後刷りと見られる菱屋版の、刊記が異なる二

種の同版本が存するのみである。野田版と菱屋版との間では、刷り具合の差はあるものの補刻などの改変はみられず、本書の本文が実際どちらに拠ったのか、本文から判断するのはむずかしいが、おそらく菱屋が求版し外篇を再摺したのは『狂言記拾遺』刊行（享保一五（一七三〇）年刊）以降のことで、正徳元年より後と考えられ、本書は外篇の初版、野田版に拠ったものと考えられる。ここで「ぶす」の冒頭部分で比較してみる。

・本書（26オ）

▲大名　此あたりの大名で御ざる。
今日はさる方へ参る。太郎くわ
じやをよび出し申付る事が
ある。太郎くはじや有か▲太郎くわじや　はあ
▲大名　いたか▲太郎　御まへに▲大　ねんなふは
やかつた。次郎くはじやもよべ▲太郎　畏て
御ざる。次郎くわじやめすは▲二郎
心得た御まへに▲大　汝らをよび出す
はべちの事でない。けふはさる
かたへゆく両人共にるすをせい

・外篇野田版（巻三　11ウ）

▲大名　此あたりの大名で御ざる。今日はさる方へ参る。太郎
くわじやをよび出し申付る事がある。太郎くわじや有か
▲太郎くわしや　はあ▲大名　ゐたか▲太郎　御まへに▲大名　ねんなふはやかつた。次郎くは

じやもよべ▲太郎　畏て御ざる。次郎くわじやめすは▲次郎くわしや　こゝろへた。御まへに▲大名　なんじらをよび出すは別の事でない。
けふはさる方へ行。両人ともに留守をせい

やはり、かなづかいや濁音の有無、語の漢字表記などに異同はあるが、正篇と同様に本文を改変したところはなく、本書全体でも少ない。また、外篇で「別の事」と漢字表記のところを、本書が「べちの事」と、かな表記しているなど、表記の異同から外篇の本文の読みや解釈の手がかりが得られる場合もある。明治の活字本で誤読の多い「まらする」（多く「まうする」と翻字する）を誤っていないのも、この語の記憶が正徳年間にはまだ存していたためだろう。八番ではあるが、他には見られない外篇の別版の本文として本書は貴重である。

四、さし絵について

前節では本文の比較から、本書の拠った正篇が主として元禄版であったと推定したが、このことはさし絵の比較からも裏付けられると思われるが、さし絵の場合、本書での改変も目立つ。

本書のさし絵は全一七番の狂言のうち一六番に添えられている。概して小さく稚拙で、役者をクローズアップして描いているため本舞台の屋根・鏡板・柱・橋掛りなど、能舞台の全体がほとんどわからない。いっぽう正篇・外篇のさし絵は大きく、役者だけでなく能舞台全体の様子がわかる構図になっており、正篇万治版に至っては観客の様子まで活写されており資料的な価値も高いのとは対照的である。また、正篇・外篇ともさし絵は本文の末に置かれているのだが、本書では本文の途中、丁の表側の右半分（一〇行分）を使って描かれており、この点でも相違がある。

さて、本文同様、正篇万治版・元禄版と外篇のさし絵と本書のさし絵を比較してみると、一六番のさし絵のう

ち外篇にある八番については、ほとんど外篇のさし絵の構図と相違がなく、外篇をもとにさし絵を描いたと考えられる。ただし「鞠蹴座頭」だけは、外篇が四人の検校・座頭が蹴鞠をする様子を通行人が橋掛りから見るという構図で描かれているのだが、本書では検校と鞠を持つ座頭の二人を描くだけに改変されている。おそらく冒頭の場面を想定しての改変だろう。小さいスペースに五人を描くのは無理と考えたのだろうか。

いっぽう正篇にある九番では、元禄版をもとにしたと見られるさし絵が「笠の下」「武悪」「こんくわい」「長光」の四番にとどまる。「伯母が酒」「伊文字」では元禄版に拠りながらも役者の動きが大きく異なっている。さらに「二千石」「どぶかつちり」では、元禄版ではなく万治版のさし絵に拠った可能性がある。というのも、「二千石」は、元禄版にはさし絵がなく（「柿山伏」に本書でさし絵が入れられなかったのもこのためではないか）、万治版に拠るしかないからである。しかし、万治版のさし絵と較べると「二千石」では、本書のさし絵では冠者が座っているのに万治版では冠者が立って描かれていて相違しているし、「どぶかつちり」では、道行人を中心に左右に勾当と菊一が座る構図は万治版と本書で共通しているが（元禄版は菊一が通行人を背負う場面が描かれている）、よく見ると本書では、竹筒ではなく大きな瓢箪から酒を注いでいるように描かれていて、相違するだけでなく狂言の舞台で実際の酒を注ぐ演技はないと思われ、このさし絵には疑問が残る。

このように、本書のさし絵は、正篇では主として元禄版に、外篇では野田版に拠ったことは確認できた。しかし、正篇万治版も利用された可能性があり、本文にはあまりみられなかった本書のみの改変が、さし絵には目立つのはどのような理由によるのだろうか。狂言の実演をあらたに取材した結果とすれば、本書の本文にもっと改変が及ぶはずであり、「狂言記」以外の何らかの狂言舞台図が参照されたのであろうか、あるいは実際の狂言の舞台図から離れ、単なる内容説明の「さし絵」として描き換えられたものなのであろうか。いまのところ解釈を保留せざるを得ないが、本文とさし絵の食い違いとして注意される。

五、おわりに

本書刊行の前後、宝永六（一七〇九）年と正徳五（一七一五）年刊の『増益書籍目録大全』[11]には、「狂言記」として次の四種が挙げられている。

五　狂言記　同小本　四匁三分（寛文五年版）
野田　三匁五分（正篇元禄版）

五　同　外　野田　鷺流　四匁五分（外篇野田版）
八尾　大蔵流　三匁五分（続篇）

これらはおそらく（　）内の各版をさすものと考えられるが、本書はこのうち、正篇元禄版と外篇野田版の二種に拠っている。逆に見れば、同じ目録にある寛文五年版や続篇からは採っていないことになる。寛文五年版については二節で触れたが、続篇から採っていない理由はどのようになるだろうか。これも残された問題のひとつであるが、目録に示してある（実際には何の根拠もないのだが、）流派名に注目してみると、観世流の小謡本である本書には、観世座付の鷺流狂言を記している（と目録に謳っている）外篇から採るのがふさわしく、大蔵流狂言の続篇は除外されたと考えられないだろうか。しかし、そうすると正篇には目録では流派が示されておらず、そこから採った理由を明らかにしなければならない。

本文の語学的な分析よりも、本書の資料的な吟味が先行し、それも確証の得られない推定にとどまるものも多いが、これも新たな資料の位置づけのためには重要な手続きであると考える。

最後に、本稿を成すにあたり貴重な御蔵書の閲覧・写真撮影をお許しいただいた法政大学能楽研究所に心より御礼申し上げる。

（注）

（1）本稿で用いた「狂言記」および主な狂言台本は以下の通りである。（　）内は本稿での略称。

・『ゑ入狂言記』（正篇万治版）　万治三（一六六〇）年刊。北原保雄・大倉浩共著『狂言記の研究』（昭五八　勉誠社）を用いた。

・『狂言記（狂言尽）』（寛文五年版）　寛文五（一六六五）年刊。筑波大学蔵本を用いた。

・『絵入狂言記』（正篇元禄版）　元禄一二（一六九九）年刊。筑波大学蔵本を用いた。

・『新板絵入狂言記外五十番』（外篇）　元禄一三（一七〇〇）年刊。北原保雄・大倉浩共著『狂言記外五十番の研究』（平九　勉誠社）を用い、鴻山文庫蔵本を参照した。

・『続狂言記』（続篇）　元禄一三（一七〇〇）年刊。北原保雄・小林賢次共著『続狂言記の研究』（昭六〇　勉誠社）を用いた。

・『狂言記拾遺』（拾遺）　享保一五（一七三〇）年刊。北原保雄・吉見孝夫共著『狂言記拾遺の研究』（昭六二　勉誠社）を用いた。

・大蔵虎明書写『狂言之本』（虎明本）　寛永一九（一六四二）年書写。池田廣司・北原保雄共著『狂言集の研究』（昭四七～五八　表現社）を用い、複製本を参照した。

・『狂言三百番集』（三百番集本）　野々村戒三・安藤常次郎共編（昭一三～一七　冨山房）を用いた。底本は幕末の和泉流狂言師三宅庄市手沢本をもとにしたもの。

（2）池田廣司（一九五三）、林和利（一九八〇）、北原・大倉（一九九七）解説篇第1章など参照。

（3）林和利（一九八五）、大倉浩（一九八九）参照。

（4）法政大学能楽研究所鴻山文庫蔵本による。

（5）表章（一九六五）第三章参照。

（6）注（5）同書五七七ページ。

（7）大倉（一九八五）・（一九九一）参照。

（8）注（1）『狂言記（狂言尽）』のこと。

（9）以下の引用では、原文のままに翻字・改行し、濁点などは補っていない。
（10）野田版の刊記は「京寺町通二条下ル町　野田弥兵衛／大坂北御堂前　毛利田庄太郎／江戸石町拾軒店　野田重兵衛」の三書肆。菱屋版は「京寺町通松原上ル町　菱屋治兵衛」とある。北原・大倉（一九九七）解説篇第1章など参照。
（11）林和利（一九八〇）参照。

［参考文献］

池田廣司（一九五三）「版本狂言記の台本について」（『国語』二―三　昭和二八年九月）
　同（一九六七）『古狂言台本の発達に関しての書誌的研究』（昭和四二年　風間書房）
大倉浩（一九八五）「版本狂言記の「おりゃる」と「おぢゃる」」（『日本語と日本文学』五　昭和六〇年一一月）
　同（一九八九）「「しぎ（仕儀）」と「てうぎ（調儀）」―狂言「武悪」をめぐって―」（『静岡英和女学院短期大学紀要』21　平成元年二月）
　同（一九九一）「『狂言記外篇』の「まらする」」（『国語国文』六〇巻七号　平成三年七月）
表章（一九六五）『鴻山文庫本の研究　謡本の部』（昭和四〇年　わんや書店）
北原保雄・大倉浩（一九九七）『狂言記外五十番の研究』（平成九年　勉誠社）
鈴木浩・渡部圭介（一九九一）「鷺流狂言『延宝・忠政本』の国語資料としての位置づけ」（『日本近代語研究1』平成三年一〇月　ひつじ書房）
橋本朝生・土井洋一（一九九六）『狂言記　新日本古典文学大系58』（平成八年　岩波書店）
蜂谷清人（一九七七）『狂言台本の国語学的研究』（昭和五二年　笠間書院）
　同（一九八〇）「狂言のことば（補）」（『能楽全書　綜合新訂版五』昭和五五年八月　東京創元社）
林和利（一九八〇）「〈狂言記〉の出版状況」（『能―研究と評論―』19　昭和五五年一二月）
　同（一九八五）「近世初期の手猿楽狂言の演技と舞台―寛文二年版『狂言記』の画証的考察―」（『演劇学』26　昭和六〇年三月）
　同（一九九四）『能と狂言―生成と展開の諸相―』（平成六年　世界思想社）前記二論文を所収。